おわりに

―大阪教育大学の挑戦―

鈴木　真由子（附属学校統括機構副機構長）

本冊子は，大阪教育大学附属天王寺小学校，附属天王寺中学校，附属池田小学校におけるカリキュラムマネジメントの実践研究及び研究者による理論研究に基づく 3 部構成で編成した。収録された内容は，とりもなおさず大阪教育大学の挑戦の足跡である。

実践に先立ち，第 1 部では，附属 3 校のカリキュラムマネジメントに関わる基礎的事項，例えばマネジメントサイクルや組織体制，リーダーシップやリソースマネジメントなど，実践で用いられている主な理論を整理した。

第 2 部では，本学の 3 つの附属学校の取組について，カリキュラムマネジメントの観点から問い直し，可能な限り客観的な評価を試みることで新たな価値を発見するとともに，そのプロセスを可視化することを目指した。

附属学校は，管理職（副校長）によるガバナンスを効かせたトップダウンと，中規模校というスケールメリットを活かした教諭からのボトムアップのバランスが取り易く，結果としてカリキュラムマネジメントがスムースに遂行できたと考える。加えて，教務主任や研究主任といったミドルリーダーが名実ともにその役割を果たしたこと，及びカリキュラムマネジメントを分掌として実行・評価する何らかの組織が存在していたことが，有機的な取組を可能にしたと推測する。

本研究では，実践家（附属学校）と研究者（大学）で構成されたカリキュラムマネジメント研究会のメンバーが問題意識を共有するとともに，関与している複数の研究者が随時附属学校を訪問して調査研究活動に参画した。理論的な背景に基づいて目の前の児童・生徒・教諭の姿を確認しつつ，カリキュラムマネジメントの方向性について継続的に協議する機会を設けたことが重要な意味を持つことになった。

こうしたカリキュラムマネジメントの効果を合理的に検証する際，記録の整理が不可欠であることは自明である。加えて，取組前後の変容を確認・検証しようとした場合，合目的的なデータの収集が必要となる。先行実践や既存の理論・システムを援用したり，外部の学識経験者からのアドバイスを受けたりしながら，効果検証に求められるデータ（≒エビデンス）を精査する必要がある。加えて，実践研究の成果を継続的に収録した研究紀要や報告書等の蓄積が，カリキュラムマネジメントの観点から取組を問い直すことを助けた。

なお，教育上のデータ管理については，個人情報保護の点からも慎重に扱う必要があることは言うまでもないが，個々の児童・生徒の学習履歴の蓄積は個別最適な学びを保証する上で重要な意味を持つ。それらを学びの振り返りの資料としてそれぞれの学習者に還元するだけでなく，カリキュラムマネジメント自体の評価の材料として有効活用したいところである。そのためには，蓄積されたデータをアーカイブ化するとともに，関係者が共有できるシステムの構築が急務であろう。合目的的なカリキュラムマネジメントに必要なデータの収集及びアーカイブ化が可能かどうか，現在，「教育 DX」の一環として附属学校が導入している教務支援システム等を含めて検討する必要がある。その際，コストパフォーマンスとともに，タイムパフォーマンスも考慮しなければならない。

第 3 部では，研究者が 3 附属学校の実践やカリキュラムマネジメントに関連した研究論を，それぞれの研究者の研究テーマとの接点を軸に展開している。上述したように，執筆者の多くが附属学校を継続的に訪問して児童・生徒の学びにふれただけでなく，教員の迷いや葛藤にも向き合ってきた。そうした実践研究を介した交流経験が，研究者に直接的・間接的な刺激と影響を与えたことは想像に難くない。

すべての教育課題が解決しない限り，カリキュラムマネジメントに関わる取組に終わりはない。その意味において，本研究，すなわち大阪教育大学の挑戦も道半ばである。今後も継続してアウトプットを蓄積し，目指すアウトカムに近づけたいと考える。そのためには，これまで以上の程度と頻度で附属学校と大学とが協働的に実践研究に取組んでいかなければならない。

読者の皆様から，本冊子に関する忌憚のないご意見をいただければ幸甚である。そうしたご指摘を受けることで，大阪教育大学の新たな挑戦に向けた目標を再設定し，次のステップを踏み出す所存である。